

IAUD Newsletter vol.5 第7号 (2012年8月号) 目次

1. 特集：香港「設計知識週 2012」講演会及びWS参加報告・・・1
2. 衣のUDPJ 災害衣料についての勉強会開催報告・・・6
3. スペインUD通信・・・9

香港で開催された「設計知識週 2012」に参加して 特集：川原専務理事 基調講演及びワークショップの報告



香港デザインセンター主催の「設計知識週 2012 (Knowledge of Design Week 2012)」が6月25日(月)から29日(金)にホテル・アイコン(香港・九龍半島)で開催され、招待された川原啓嗣専務理事(インダストリアルデザイナー/名古屋学芸大学大学院教授)が基調講演及びワークショップを行いました。その要約を川原専務理事に報告させていただきます。

設計知識週とは



「設計知識週」は香港デザインセンターの基幹活動として毎年行なわれるイベントであり、香港特別行政区におけるデザイン界、産業界、教育界等に共通認識の機会を提供する役割を担っています。今年是中国返還15周年を迎え、7月1日に記念セレモニーが盛大に開催されましたが、「設計知識週 2012」も、かつてない盛大なイベントとして開催され、世界各地から著名な講演者が招聘されました。

講演参加登録を行なう人々でごったがえすロビー

「設計知識週 2012」の概要は下記 URL 参照
<http://www.hkdesigncentre.org/kodw/2012/index.html>

香港のラジオ番組に出演



私が香港に到着したのは、講演が予定されている6月28日（木）の2日前の26日（火）でした。

日々の仕事に追われ、なかなか講演の準備がままならないため、海外の講演ではいつも2～3日前に現地に入り、滞在するホテルでプレゼン内容の整理を行なうことにしているのですが、今回は主催者である香港デザインセンターの計らいで、27日（水）の午前中に放送されるRTHK香港電台（Radio Television Hong Kong）のラジオ番組「Morning Brew」に生出演し、イヴ

ェントの宣伝を兼ね、講演の概略を話すこととなりました。（上写真。左は番組のジョッキー）

海外の放送局での出演は初めてでしたが、得難い経験となりました。

ラジオ出演の詳細は下記 URL 参照

http://programme.rthk.org.hk/channel/radio/programme.php?name=radio3/morning_brew&d=2012-06-27&p=2505&e=182986&m=episode

→RTHK 香港電台ロゴ
をバックに出演記念写真



オーナーは大学の高級デザイナーズ・ホテル



27日夕方7時から、歓迎ディナーがコンファレンス会場となっているホテル・アイコンのカフェラウンジで開かれました。

ホテル・アイコン（左写真）は九龍半島の繁華街チムシャツィに、昨秋オープンしたばかりの高級デザイナーズ・ホテルです。

テレンス・コンランほか著名なデザイナーがインテリア各所に起用され、クオリティ高く仕上がっていますが、特筆すべきは、その運営スタイルです。

実はこのホテルのオーナーは1ブロック隣の香港理工大学 (Hong Kong Polytechnic University) であり、ホテルの従業員はすべて、ホテル・観光経営学科の教官や研修生たちとのこと。

なかなか洗練されたサービスとホスピタリティで、質の高い「おもてなし」で定評のある日本のホテル業界もまだまだ学ぶべき点は多いと感じました。

→ホテルの窓から見える香港理工大学がホテル・アイコンを経営



基調講演「なぜ日本製品はすべての人に恩恵を与えるのか」



↑講演会場の様子。演台はノルウェーデザイン協議会のオンニ・エイクハウグ氏

「設計知識週」の前半にあたる6月25日(月)～27日(水)の3日間はプレコンファレンス的位置づけで、11のワークショップが行なわれました。

そして、後半のメインコンファレンスにあたる28日(木)と29日(金)に3つの講演セッションと2つのワークショップが行なわれました。講演セッションでは、英語と広東語の同時通訳が実施されていました。

私は、28日午前中の最初のセッション「高齢化とデザイン：地球的ビジネス展望 (Conference on Ageing and Design : Global Business Perspectives)」において、「0歳から80歳まで：なぜ日本製品はすべての人に恩恵を与えるのか(From 0 to 80 Why Japanese Products Benefit All)」と題して基調講演を行ないました。

まず、日本が世界に先駆けて超高齢社会となっている現状、そして香港、そして中国も急速に高齢化の道をたどり、いずれ日本と同様の社会形態となること、今のうちにユニバーサルデザインに配慮した社会構築に向け、知恵を出しあって行動しなければならないことを説明しました。

次に、日本における最近のUD商品・サービスの事例を写真や動画で紹介しました。私の講演については、あらかじめシンガポールのメディア Indesignlive Singapore からも取材を受け、下記URLに掲載されました。

<http://www.indesignlive.com.sg/articles/in-review/Ageing-and-Design>

このセッションにおける他の3人の基調講演者（英国王立芸術大学院のラーマ・ギーラオ氏、ノルウェーデザイン協議会のオンニ・エイクハウグ氏、そして米国アートセンターデザイン大学のショーン・ドナヒュー氏）と私は、その後のパネルディスカッション、及び2つのワークショップも共同で進行することになっていました。

基調講演を行なうラーマ・ギーラオ氏



ワークショップ「ビジネスとデザイン」開催



28日午後は、「デザイン教育」をテーマとする講演セッションが行なわれましたが、私達4人は別室にて「ビジネスとデザイン：人間中心のアプローチ(Business and Design: A People-centred Approach)」と題し、30~40人の参加者と共に3時間半のワークショップを行ないました。(左写真)

参加者は学生、デザイナー、福祉コーディネーター、作業療法士、看護師など様々な分野の人々でした。

香港経済日報の取材

最終日の29日は「グローバルデザイン戦略(Global Design Strategy)」と題するフォーラムが開かれたのですが、私には、香港経済日報(Hong Kong Economic Times)の取材の予定が組まれていましたので、別室でカメラマンによる写真撮影と記者のインタビューを受けました。(右写真)



記者はさかんに高齢者向けのデザインのポイントを聞きたかったようですが、かつて日本で「シルバーマーケット」等の高齢者向けを謳った商品開発はことごとく失敗したと私が話すと、信じられないというような顔をしていました。

後日、送られてきた香港経済日報の紙面

だからこそ、年齢、性別、能力の違いを問わず多様な人々に使える UD の考え方が重要だと力説すると感慨深げに頷いていましたが、ジャーナリストの反応はどこの国もあまり大差なく、果たしてどの程度理解してくれたかと、いつもヤキモキさせられます。

ワークショップ「不可能な任務」開催

夕刻より開始された最後のワークショップは、「不可能な任務：あなたは日常のデザインを使えていますか(Mission Impossible : Can you use everyday designs?)」と題して実施しました。(右写真)

これは、日本でも行なわれている高齢者・障害者疑似体験プログラムともいうべきもので、初めての体験という参加者も多く、たいへん好評でした。



香港で見た UD

すべての役目を終えた次の日、30日(土)は15年ぶりの香港市内観光に出かけましたが、新しい高層ビルが増え、街並も変わったものの、中国返還を意識させられるような大きな印象の変化は感じませんでした。

ただ、MTR(地下鉄)やバス等の公共交通機関のアクセシビリティは確実に向上しており、世界の大都市に見られるグローバルスタンダードの域に達していることは間違いのないと思われました。



繁華街ネイザンロードを歩く。漢字のサインは日本人にはありがたい



九龍の繁華街チムシャツィ周辺マップ。広東語と英語の表示はわかりやすい



チムシャツィ駅の乗り換え用地下道はアクセシビリティもよく考えられている



MTR（地下鉄）駅には完全密閉式のプラットフォームドアが設置されている



ホテルの窓より対岸の香港島を望む

7月1日に返還15周年を迎え、特別行政区の体制も変わると期待に胸を膨らませる香港の人々は、35年後、つまり返還から50年後の2047年には資本主義制度が終わり社会主義体制に組み込まれることをどのように考え、そして丁度その頃、日本と同様の超高齢社会となる香港の将来設計を果たしてどのように描こうとするのか、対岸の香港島との間で暮れなずむヴィクトリア海峡をホテルの窓から眺めつつ、しばし思いを巡らせていました。(了)

災害時に真に役立つ衣料とは何か

活動報告:衣のUDPJ 馬場賢親氏との勉強会開催



「災害時衣料の研究」を今年度の研究テーマの一つに活動している衣のUDプロジェクトは、東日本大震災の支援活動を続けているNPO法人プレジャーサポート協会理事長の馬場賢親氏(写真右)を講師に招き、「災害時に真に役立つ衣料とは何か」をテーマにした勉強会を6月21日(木)にIAUDサロン(東京・八丁堀)で開催しました。馬場氏には救援活動を通じて感じたことや、その経験を基に同PJへの提言もお話しいただきました。その報告を同PJ主査の伊豆野隆信氏に報告していただきます。

馬場氏の東日本大震災での救援活動

プレジャーサポート協会は、障害者や高齢者のアウトドアライフの支援や応急救護手当の講習などを手掛けている団体です。

馬場氏は東日本大震災発生直後から今日に至るまで、被災地での様々な救助、支援活動を続けています。

震災直後には有志を集め、必要な支援物資を調達したほか、チャーターしたヘリコプターでボートを運び、自ら救助活動を行うなど行動力も発揮されました。それらは自費で賄っており、正にボランティアを超えた活動をされています。



被災地での”衣”の問題とは

馬場氏に、被災地での支援活動を通じて感じた衣服の問題点をまとめていただきました。

- ・何よりもまず過酷な寒さが被災者を襲った。
- ・衣類が調達されるまで1週間はかかり、場所によって格差はあるがその間に体臭の問題が出てくる。これはボランティアも同様で、作業での汚れから匂いもきつくなる。
- ・不足したものは肌着、靴下で特に女性用（送られて来るのは男性用が多い）。また、防寒着やジャージ（24時間着られるので需要度が高い）、作業着、女性の生理用品、赤ちゃんのお尻拭き。
- ・衣料品の寄付もあったが、汚れていて使い物にならない物も中にはあり、また大概が、種類もサイズもごちゃ混ぜで、仕分け作業に多くの時間を取られた。

被災地で役に立ったもの

さらに、支援活動で感じた被災地で真に役立ったものもお話しいただきました。



宇宙船内で着用するために開発された抗菌・防臭下着は効果大だった。（注1）

- ・衣類ではないが、リュック型の飲料水袋は両手が使え、子供でも背負えるので非常に良い。（注2）

・馬場氏も自らが考案したボランティアジャケットを着用して救助にあたった（注3）

・馬場氏はボランティアの方々が主に清掃作業をするための「ボランティア装備セット」を作って配布した。これはリュック・つなぎ・カ

ップ・軍手・絆創膏・靴下・衛生用品・長靴・バケツ・スコップなどを1つのパックとしたもので、100～150セット用意した。（上写真）

(注1)：日本女子大学 多屋淑子教授が宇宙船内用に開発した抗菌・防臭性の高い下着。ネットで購入可能。

(注2)：ポリエステル製のビニール袋がリュックの形になっており、市販されている。

(注3)：ベストの中にナイフ・LEDライト・ラジオ・トランシーバー・マスク・ロープ・手袋・携帯電話等々を入れ、リュックには衣類・テント・簡易トイレ等が入り、他に180缶(椅子にもトイレにもなる)、スコップも携帯。

衣の UDPJ への提言と今後の課題

最後に、今日に至るまで支援活動を基に、衣の UDPJ にご提言を頂きました。



- ・何より災害発生から最初の72時間を生き抜く事が重要で、それに役立つものを考えて欲しい。
- ・日常でも着用でき、且つ非常時でも役立つ衣類は難しい。やはり別途緊急用ジャケットを用意すべきでは。
- ・素材にも注意。アレルギーを起こす物もある。またナイロンは熱に弱いので要注意。
- ・防災ジャケットなどはあると役立つのでは。中にいろいろ入れられるが、その人によって、またシチュエーションによって内容を替えられる。

・衣の UDPJ が作成した UD ジャケットは「応用すれば災害時に役立つのではないかと好評を頂いた。

衣の UDPJ が開発した「着易さと操作性の高い、且つデザイン性のあるジャケット」は、UD ジャケットとして「第3回国際 UD 会議 2010in 浜松」で発表し、現在は災害時でも役立つものへ昇華させようと研究を進めています。今回の勉強会で、その方向性が正しかったと確信を持ってました。

今後は馬場氏から頂いた貴重なご意見を活かしながら、「災害時に役立つ UD ジャケット」の開発に努力してゆきたいと思えます。

今秋の「第4回国際 UD 会議 2012in 福岡」では何等かの形で発表できればと考えております。(了)

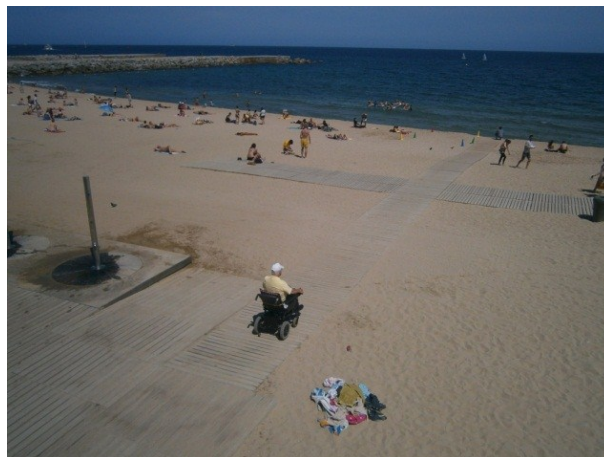


新企画 スペイン UD 通信

1. 誰もがビーチを楽しめる工夫

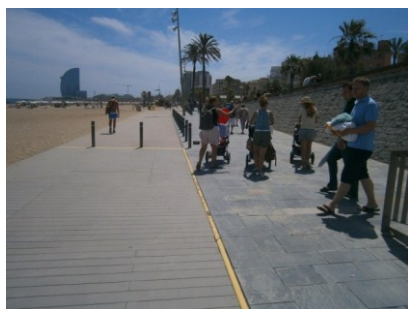
今号よりスペイン・バルセロナ在住の IAUD 事務局員アギラフェルナンデス直子さんに、スペインで生活する中で UD に関して気づいたことを連載していただきます。

(IAUD 情報交流センター所長 西村)

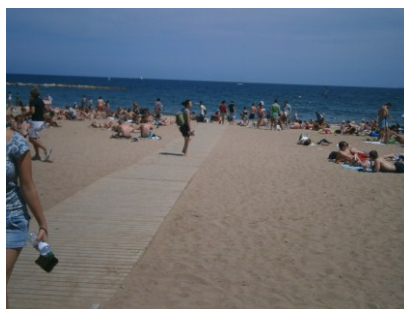


バルセロナ在住のアギラです。第1回目はバルセロナ周辺のビーチで目にした UD です。地中海に面しているバルセロナのビーチは連日、日焼けや海水浴、ヨットやサーフィンなどマリンスポーツを楽しむ地元の人々や観光客で賑わっています。

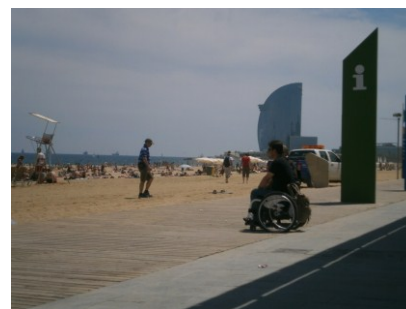
ビーチ周辺には、誰もが使いやすいような工夫が見られ、自転車やベビーカー、車いす利用者や高齢者も多く見られます。



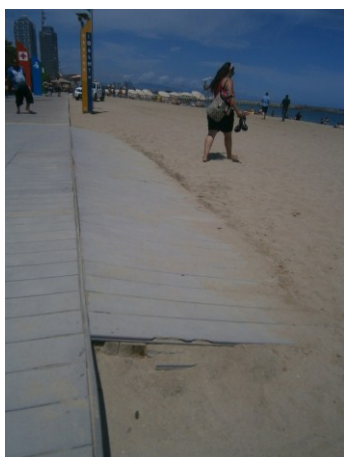
ベビーカー連れのお母さんたち



砂浜に整備された歩道



日光浴を楽しむ車いす利用者



ビーチの入り口には斜面（左写真）が設置されているほか、木製の遊歩道が波打ち際まで整備されています。そのため、足を汚さないで快適に砂浜を散歩できますし、車いすやベビーカー利用者、杖をついた高齢者なども海を見ながらの散歩を楽しめます。

また、ビーチにはバリアフリー化された無料のシャワーとトイレが設置されており、案内表示（左写真）も明確です。



バリアフリー化された無料シャワーとトイレ



夕暮れのビーチでのベビーカーと車いす利用者

ベンチでくつろぐ高齢者たち

さらにバルセロナ市役所は、障害者や高齢者も安心して海水浴が楽しめるよう、車いすのまま人を海まで運ぶリフトの提供や海水浴をお手伝いするヴォランティアなど、様々なサービスも提供しています。(了)

次号は8月下旬発行予定

特集：住空間PJ仮設住宅勉強会開催報告（予定）

無断転載禁止

IAUD 情報交流センター（IAUD サロン）：
〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9 トヨタ八丁堀ビル 4 階
電話：03-5541-5846 FAX：03-5541-5847 e-mail：salon@iaud.net